

日本のラグビーの展望～世界のラグビーを参考に～ The future prospect of Japanese rugby ~Referring to rugby of the world~

1K09B073

指導教員 主査 間野義之 先生

黒澤 健

副査 寒川恒夫 先生

【緒言】

ラグビーの起源には諸説あるが、正確には分かっていない。イギリスのパブリックスクールでフットボールの中から現代のラグビーが作られたと言われている。ラグビー校でのフットボールの試合中にウェブエリスがボールを持って走りだしたことで誕生したという話が一般的で、ラグビーはサッカーから生まれたと言われるが、このフットボールはサッカーのことではない。その後ラグビーはヨーロッパを中心に世界に広がった。

【日本のラグビー】

日本へは明治 32 年に慶応義塾大学にイギリスから持ち込まれた。大学を中心にラグビーは日本に広がり、80 年代には絶大な人気を誇った。代表チームの世界進出や、トップリーグの開幕、プロ選手の登場など日本ラグビーは進化してきたが、現在は世界ランキング 15 位で、世界の壁を越えられない状態が続く。競技人口では少なくないにもかかわらず、競技レベルはなかなか上がらない。その原因として日本独自の学校中心のユースラグビーの指導や、国内リーグしかないこと、経験を培うことができない大学ラグビーの形などがある。

2016 年のリオオリンピックでは 7 人制ラグビーが正式に競技種目になることが決まり、また 2019 年にはアジアで初めてラグビー W 杯が日本で開催される。7 人制での成果と、W 杯ベスト 8 入りを目指す日本ラグビーは様々な角度からの普及や、ユース世代からの一貫強化システムの開発、コーチングレベルの向上、協会の資金調達などの取り組みを行っている。しかし、世界のラグビーに目を向けると、日本にはない取り組みが多くある。日本ラグビーが今後、目標に向け成長していくには世界ラグビーの取り組みを参考にすべきである。

【世界のラグビー】

イギリス 4 カ国の対抗戦を皮切りに、ラグビーの国際試合は発展してきた。また、イギリスの植民地であったニュージーランドやオーストラリア、南アフリカでもラグビーは急激な進化をし、今やこの 3 カ国は世界のトップに君臨する。それをフランスやイギリスが追う形になっている。世界 1 位のニュージーランドは競技人口こそ日本とあまり変わらないが、男女ともに世界最強を誇る。そのライバルであるオーストラリアは W 杯を 2 回制している。イングランドは競技人口世界一を誇る。最近ではテストマッチでニュージーランドの連勝記録を止めるなど復活の兆しを見せる。フランスは非英

国文化圏として稀な古豪で独自のプレースタイルで世界上位に君臨する。ラグビー W 杯はオリンピック、サッカー W 杯と並び世界三大スポーツと言われるほどの大会である。また世界には様々なリーグ戦や国際大会があり、強豪国の代表や、地域クラブが競い合っている。

【参考にするべき取り組み】

強豪国を見ると日本に無い、参考にするべき取り組みが見える。ユース世代が豊富な国際試合を経験できるような長期的なシステム。スパーラグビーなどのように、企業やクラブチームからなる国際的なリーグの設立。カンタベリー協会の子供をスタジアムに集めるキャンペーンや、フランスのタッチラグビー・ビーチラグビーによる老若男女に渡る普及方法。協会による一貫指導の場やシステムの提供。また、学校でのラグビーが中心である文化の日本では難しいかもしれないが、クラブの発展が日本でラグビーの普及・強化に繋がるのではないかな。

【まとめ】

日本ラグビー協会は 2019 年の W 杯の自国開催に向けて代表の強化のために戦略計画を打ち出し、様々な取り組みを行っている。日本ラグビーの取り組みを調べるとともに、強豪国である 4 つの国のラグビーの形や強化策、普及方法を調べると日本が取り入れるべきシステムなどがまだまだ見えてくる。歴史や文化の違いはあるが、日本が世界の壁を越えるためにも、世界から学ぶことが必要だと考える。